

69号

愛鳥教育

2004.2



全国愛鳥教育研究会



書籍紹介

森の野鳥を楽しむ101のヒント

著者：日本林業技術協会編

出版：東京書籍

サイズ：B6判 / 230P

ISBN：4-487-79965-1

発行年月：2004.2

本体価格：¥1,400

もりまき通信の著者である桐原真希氏とご主人の佳介氏も執筆陣に加わった「森の野鳥を楽しむ101のヒント」が発行されました。

それぞれ、

「羽を拾ってみませんか？」 P 180

「野鳥の餌付けはよいこと？悪いこと？」 P 190

を担当されています。

書評については、次号にでも掲載したいと思っておりますが、参考図書としてとりあえずその情報を掲載いたします。

愛鳥教育 No.69 2004.2

目次

書籍紹介

森の野鳥を楽しむ101のヒント-----2

第3回

環境教育研修会 in YOKOHAMA

報告-----堤 達俊 3

もりまき通信(19)

何がちがうの？

生き物の呼び名-----桐原(森)真希 13

村本義雄顧問

トキ保護功労者として表彰される-----15

編集後記-----15

研修会報告

第3回環境教育研修会 in YOKOHAMA

～教職員のためのバードウォッチング講座～

全国愛鳥教育研究会常務理事（横浜市立恩田小学校） 堤 達俊

3回目となった環境教育研修会 in YOKOHAMA。今回は、カモの観察を中心に計画してみた。参加したのは、横浜市を中心とした小学校の先生方12名。バードウォッチングについては初心者が多く、総合的な学習で野鳥をどう活用したらよいのだろうかという問題意識から参加した方が多いように思われた。

それでは、以下、研修会で使用したテキスト（前号に掲載）をもとに、研修会を振り返ってみたいと思う。

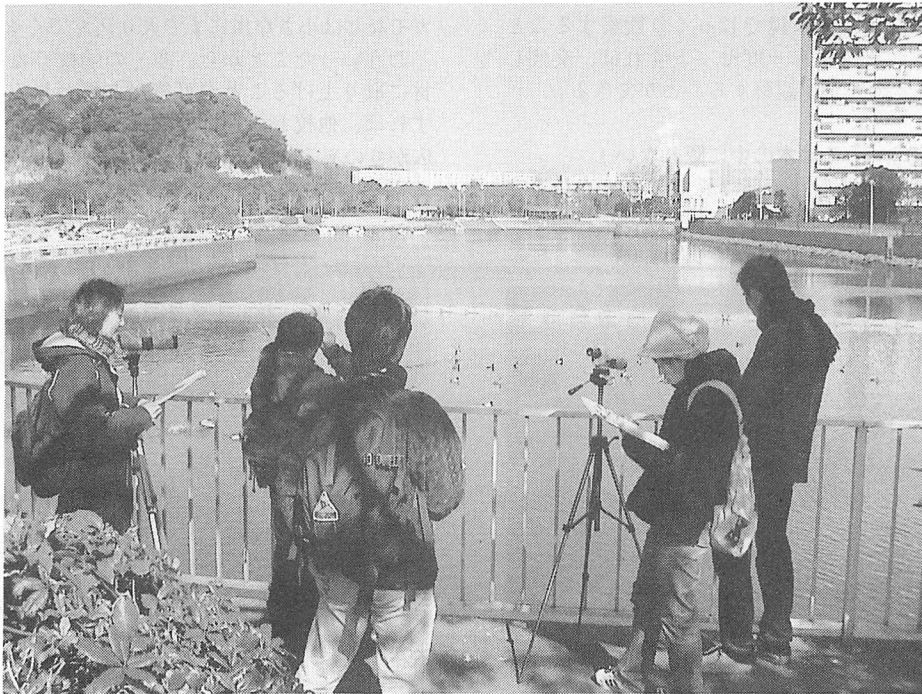
◎研修会の場所（長浜公園野鳥観察園及びその付近）について

長浜公園は、横浜市南部の金沢区に位置している。明治時代に、外国から来た船が検疫のための消毒や隔離などの期間に停泊していた港（船たまり）の跡である。その後、沖合1.5キロメートルまで埋め立てられたため、現在は、水路で

海とつながる汽水池となっている。また、長浜公園は、埋め立て当初より公園用地として計画的に確保され、その一部が野鳥観察園（7.9ha：公園全体は15.6ha）となっている。

長浜公園では、地元で観察を続けている金沢野鳥クラブにより、これまで122種類もの野鳥が観察されている。カモ類だけでも、アカツクシガモ・オシドリ・マガモ・カルガモ・コガモ・トモエガモ・ヨシガモ・オカヨシガモ・ヒドリガモ・アメリカヒドリ・オナガガモ・シマアジ・ハシビロガモ・ホシハジロ・キンクロハジロ・スズガモ・ホオジロガモの17種が記録されている。

今回の研修会では、種類数は少ないものの、より近くで観察することができる別の船溜まり（長浜公園から500メートルほど北にある）でじっくり研修を行い、その後、長浜公園まで移動して他の野鳥の観察を行った。



1. カモウォッチングは小学生に最適!

一般の教師にとって「野鳥が環境教育の窓口の一つである」ということは、今ひとつ実感の湧かないことのようにある。「スズメやカラスくらいしか知らない。」という言葉をよく聞くが、野鳥は飛んですぐに移動してしまうということが、観察しづらいという意識につながっているのかもしれない。

そこで、野鳥観察の第1ステップとして「カモウォッチング」を提案した。季節的には冬で、寒さが厳しい時期ではあるが、観察する側としては利点も多い。

◎なぜ、カモウォッチングは小学生向きなのか?

[だって1] カモは大きい!

カモは、他の野鳥に比べて体が大きい。大きいということはそれだけ見える大きさも大きく、観察しやすいということである。また、子どもたちから見ても、ダイナミックに見える体はより感動や関心を高めるとされる。

[だって2] カモは動きが素早くない!

カモは、他の小鳥類に比べて素早く動くことが少ないため、望遠鏡でじっくり観察することができる。望遠鏡も一度セットすれば、交代しながら多くの児童が観察することができる。

[だって3] カモは木の中に隠れない!

カモは、他の小鳥類とは異なり、よく見渡せ

る広い水面で生活することが多い。枝の混んだ木の中で小鳥類を見つけるより、開けた水面上でカモを見つけることの方が、小学生にとっては格段に楽である。まずは野鳥を見なければバードウォッチングは始まらない。

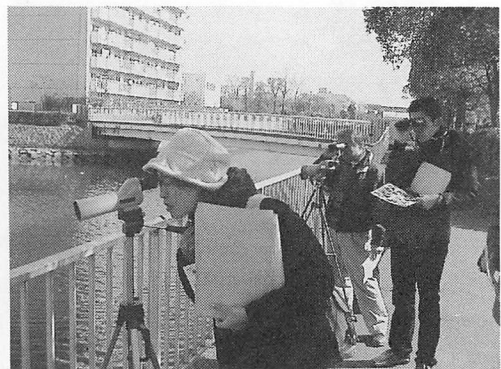
[だって4] カモはほとんどが渡り鳥!

カモの多くは渡りをする。その渡りを通して、国内だけでなく、海外にも目を向けさせることができる。今見ているカモが、北の国からやって来て、春になればまた北の国へと帰っていく。この自然の動きをぜひ見て欲しいものと思う。総合的な学習を考えた時、カモを通して、環境教育のみならず国際理解教育にまで発展させることが可能なカモ（渡り鳥）の観察は、魅力的な教材である。

[だって5] 横浜の小学校は川・海的环境下に恵まれている!

横浜は、自然海岸のほとんどが埋め立てられており、シギ・チドリ類については豊富に観察できる環境ではない。しかし、川や海的环境下には恵まれている。従って、種類や個体数の多少はあっても、ある程度のカモを観察することができる場所は比較的多いと思われる。特に、コガモなどは小さな川にまで入り込んでくる。

こういったことから、多くの学校でカモを教材に取り上げることが可能だと思われる。そうすれば、他校との連携や交流を通して、さらに広がりのある学習とすることも可能だろう。



2. 双眼鏡・望遠鏡の使い方を知らう！

双眼鏡を持っている人は多いが、その正しい使い方を知っている人はそれほど多くない。野鳥を観察するには、まずは道具の正しい使い方から指導を始めるとよい。

〔双眼鏡〕

・7～10倍、広視野、ハイアイポイントのものが使いやすい。

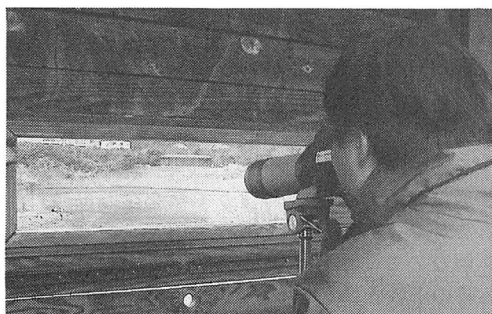
すでによく知られていることだが、倍率が高すぎるとブレの原因となり観察しづらい。また広視野のものだと、目的の野鳥を視野に入れやすい。ハイアイポイントだと、レンズから多少目が離れていても見やすい。メガネをかけていても観察しやすい。購入する際は、これらの点をカタログで比較するとよい。

・対物レンズの大きいものは明るい、子供には重すぎる。

これには異論のある方もいるかと思う。しかし、小学生（初心者）が観察する野鳥の対象は、それほど遠くはなく、授業が行われる時間帯を中心に考えると、夕暮れ時などの悪条件での観察は少ないのではないか。

明るいレンズは大人にとっては、確かに有効で楽しい野鳥観察を約束してくれる。しかし、小学生を対象にした場合は、明るいレンズを選択することで重量増が、手に持った時や首から提げた時の負荷や負担の増加につながってしまうことに留意すべきではないだろうか。

また、双眼鏡の眼幅が小さくならないのも、低・中学年の子どもには適さないように思われる。子どもの眼幅に合わせた双眼鏡を購入すべきである。



・メガネをかけている子にはゴム目当てを折るようにする。

これも、一般の人には意外と知られていない。メガネをかけていると、メガネのレンズのために、目と双眼鏡や望遠鏡の接眼レンズとの距離をそれ以上に近づけることができない。そこで、接眼レンズについているゴム目当てを折るとよい。

・メガネをかけている子とかけていない子の二つのグループに分ける。

小学校では、児童一人に双眼鏡1台という状況は少ないと思われる。そういった場合には、メガネをかけていない子とかけている子の二つのグループに分け、その中で双眼鏡を使い回すと良い。そうすれば、いちいちゴム目当てを折ったり伸ばしたりという手間がなくなり、ゴム目当ての損傷も防ぐことができる。

・アイマスクのように見えてはダメ。左右の視野が丸く重なるように眼幅を調整する。

・左右の視力の違いを補正する。

ピント調整の仕組みにはいろいろとあるが、一般的なものについては、以下のようにするとよい。

まず初めに対象物を決め、左目のみに注意を集中して、中央のピント調整ノブでピントを合わせる。次いで、右の接眼レンズリングを回転させて右目のピントも合うようにする。

この後は、中央のピント調整ノブのみで、左右同時にピント調整ができる。

〔望遠鏡〕

・パーン棒から手を放す時は、必ずストッパーを締める。

これも基本中の基本だが、きちんと確認しておきたいことである。

望遠鏡の場合、三脚のパーン棒を締め忘れて手を放すと転倒してしまい、望遠鏡本体を傷めてしまうことがある。加えて、三脚の足をきちんと開くなどの指導も必要だ。風が吹くと簡単に倒れてしまい、これも泣くことになる。

一度きちんと指導しておけば、その後の観察が楽しいものになる。

3. 知っているようで……

◎「スズメとカラスくらいしかわからないなあ」とは言いますが…。

まず、人間にとって最も身近な野鳥であるスズメだが、ちゃんと見ているようで意外と見えないもの。スズメの体型だけをかいたイラストにスズメの模様を描く活動をすることによって、身近なものなのに実はよく知らない、という自分に気付くことができる。そのため、これから観察する対象をきちんと見ようという意欲を高めることができる。効果的な導入方法の一つである。

4. 伝授！ カモを見分けるコツ ～カモをパーツに分けよ～

◎「先生、あれ何ていう鳥？」子供は、まず、そこから始まる。

名前を教えるのではなく、見分け方を教えよう。野鳥のことをよく知らない指導者からは、「野鳥のことを子どもに聞かれてもわからないから困る」という声が良く聞かれる。「わからない」にもいろいろな意味があろうが、多くは種名のことである。しかし、子供にしてみれば、まず、その野鳥の名前が知りたいというのは素朴な願いである。

種を識別するにはコツがある。くちばしの色や形、背の色、胸の色などのパーツに分けて観察し、図鑑と比較する。そうすれば、最終的に一つの種に絞り込むことができる。初心者は、一度にくちばしの色も背の色も足の色もすべて見てしまうものだ。ポイントを決めて観察すると良い。

種類数の面でも、カモの場合、よほど恵まれていない限り、一つのフィールドに多くても10種類位しかいないものである。

また、カモには♂♀の違いが見られるものが多い。♀は初心者には難しいので、オスを中心に観察すると良い。時期的には♂がきれいな繁殖羽になった1月以降が最も適している。



〔パズルを使って〕

手持ちの図鑑を拡大コピーし、カモの♂の絵を切り抜く。それを、初心者向けの場合は、頭・首と、背・胴の2パーツに切り分ける。パウチフィルムで補強すると、教材が長持ちするし防水性も高まる。

実際に観察する際、まずは頭・首の部分、次いで背・胴の部分というように二段階に分けて観察することにより、識別能力を高めることができる。

〔カモンタージュ〕

ぬり絵をするというのも、観察する眼を育てるには効果的である。「カモ+モンタージュ=カモンタージュ」などというネーミングの工夫も意欲の高まりを助ける。

〔野鳥シート（水辺で楽しむバードウォッチング
—秋・冬編—）〕

バードウォッチングの普及や社会認識の高まりと共に、図鑑や参考図書も数多く発行されるようになった。しかし、子どもたちにとって使いやすい図鑑は意外と少ない。図鑑は、珍鳥や迷鳥などの類まで含まれていたり、いちいちページをめくらなければならないので、比較するのが難しい。

そこで、本会が企画したこの野鳥シートなら、普通に見られる代表的なカモ類を全て同時に見ることでき、相互の比較もしやすい。プラスチック製なので防水性も高く、観察カードに記入する時の下敷きにもなる。



5. あなたも紅白体験してみましょう。

〔カウンターを使って〕

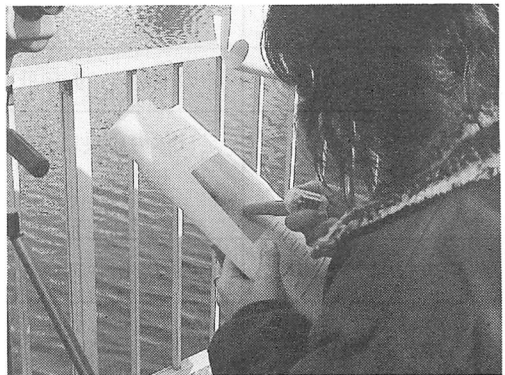
種類がわかるようになると、その種が何羽いるのか知りたくなる。群れていなければ、単純に「1羽、2羽…」と数えればよいのだが、たいていは群れているカモ類の場合、なかなか難しい。

そこで使用するのが、紅白歌合戦での採点で有名になったカウンターである。よく使われているものは1,000円前後だが、最近は100円ショップでプラスチック製のものが販売されており、それでも十分実用になる。

カウンターの使い方のこつは、頭の中をカモを識別することだけに集中し、目的のものがいたら単純にレバーを押すという動きをすることである。慣れないと、「1羽、2羽…」と数えながらカウンターを押してしまうが、それでは意味がない。

カウンターを使わない場合は、10羽や20羽を

ひとかたまりとして、その何倍くらいがいると
いうように推測して記録する。1羽1羽数えて
いると大変である上、時間がかかる。その間に
猛禽類の出現などにより、カモが全て飛び去っ
てしまったというのでは遅い。おおざっぱな数
え方のようなのだが、それほど大きな誤差が出
るものではない。



6. 行動チェック①

～カモのえさの取り方を観察しよう～

カモによって、えさの採り方に違いが見られる。えさの種類や採り方が違うということは、特定のえさだけが捕食されるのではないということである。それだからこそ、カモたちはいろいろな種類が集まっても競合することがなく、生息していくことができる。

それぞれの種がえさの採り方や生息場所に合った体のつくりや行動をしている点について、観察をすると良い。人権教育との関連も図ることができる内容でもある。

(表1 参照)

7. 行動チェック②

～カモのラブアタックを観察しよう～

◎カモは越冬地で求愛行動をする変わった鳥です。

メスの周りでオスたちがヘンな行動をし始めたら要注意！ 彼等のラブアタック開始です。

① 囲い込んで追いかける「いつまでも君を離さないよ」型

オナガガモだけに見られる求愛行動で、数羽のオスが1羽のメスを取り囲んだまま追いかけていく。

② どうだ！どうだ！の「威張り」型

あごを見せたり、頭と尾を同時に高く持ち上げたりする。

③ 早くしよっ！の「積極誘惑」型

体を水面低くし、メスの交尾姿勢に似たポーズを取る。

表1 潜水ガモと非潜水ガモの比較

	非潜水型 (陸ガモ)	潜水型 (海ガモ)
えさの採り方	<ul style="list-style-type: none"> ・陸上で歩いてえさを食べる。 ・水面に浮いているえさをくちばしでつまむ。 ・頭だけを水中に入れてえさを採る。 ・より深いところのえさを採るために逆立ちをして、足でバランスを取りながらえさを採る。" (その他、プランクトンなどを嘴でこし取るハシビロガモなどがいる。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・水中に完全に潜って、底に生える植物や魚などを食べる。 (水中で何を食べているかの観察は難しいが、水面に出てきた時に口にくわえているものを観察することはできる。)
飛び立ち方	<ul style="list-style-type: none"> ・その場から、直接飛び立つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・飛び立つ時には助走を必要とする。
足の位置	<ul style="list-style-type: none"> ・足は体の中央に位置し、歩行に適している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・足は尾の方に寄っていて、潜水した時に、水の抵抗を受けにくく、動力・舵の役目を果たす。歩行は苦手。
浮いている時の尾の向き	<ul style="list-style-type: none"> ・上の方を向いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・下の方を向いていて、水面に接する。
陸上での姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・潜水ガモに比べて立っていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・足の位置が後ろにあるため、体が立って見える。

④ 見て！見て！俺のカッコイイ羽根！ の「自慢」型

♀の前で片側の翼を上げて、次列風切羽の翼鏡を広げて見せながら、くちばしでこする動作をする。

これ以外にも多くの求愛行動が報告されている。

カモが、越冬地で求愛行動を始めるのは、繁殖地に着いてから求愛を始めるのでは、北国の短い夏の期間中に繁殖を行うための十分な時間を確保できないからだそうである。冬の間にカップリングを終え、繁殖地へ戻ったらすぐに繁殖活動に入れるようにするためのカモの智恵なのである。

今回の研修会は、2月中旬だったこともあり、目立った求愛行動を観察することができなかったが、1月頃のペア形成時期であれば、積極的な求愛行動を観察することが可能である。

8. 行動チェック③ ~自分で見つけよう！
カモのおもしろ行動~

9. 行動チェック④ ~カモカモピンゴ~

えさの採り方や求愛行動以外にも、個体独自のユニークな行動が見られ、それを観察することは楽しいことだ。野鳥や自然への親しみや関心を高めることもできる。

観察の仕方としては、ただ漫然と見るのではなく、1羽のカモを継続観察するのがよい。それをピンゴ形式にしたものが「9. カモカモピンゴ」である。予想した行動を小さな□の中に書き入れるだけでなく、大きなマスの中に気が付いた細かい行動や感想を書き入れると良い。カモカモピンゴを通してカモの生態を自然と学習することができる。

10. カモを通して学習を総合的に考えてみよう

総合的な学習で取り上げるのに適した野鳥は地域によって様々だが、カモ類は、比較的多くの学校で教材化が可能な野鳥ではないだろうか。前述したように、ある程度の広さの海や川などの水環境があればカモが渡ってくるからだ。

カモは、今回の研修会で実践したように、カモそのものについての、そして自然への関心を高め理解を深めることができるといったことに加え、いろいろな分野との関連が図れるというのも魅力的である。

環境教育では「水」を取り上げた事例が多く発表されているが、カモも水辺の生物として取り上げることができる。猛禽類に襲われたり、カモ類がえさを採ったりする場面から、食物連鎖や生態系について考えることもできる。そして、そういったことから水質改善への行動を起こしたり、他の水辺の生物の調査などに広げることできる。

国内の他の渡来地や他校との情報交換を行うこともよい。そのためには、電話・手紙・FAXなどをはじめ、パソコンなどの様々な情報機器を使用するとよい。集めた情報を処理する能力も要求されることだろう。場合によっては、地域の市民団体や学校ボランティアの方々の協力も必要になるかもしれない。

さらに、カモが渡り鳥であることの特性を生かし、外国の様子や文化を学ぶ機会も得られ、国際理解教育との関連も図れる。

以上のように、カモは、他の中心テーマから発展させた一つの分野としても扱うことができ、逆にカモから発展させて他の分野とも関連させることもできる。

これは、別にカモに限ったことではないが、野鳥は、生態系の上位に位置すること、採餌・求愛・渡りなどを通したダイナミックな生態を観察することができ、他の分野との関連が図りやすい。総合的な学習の中で、さらに注目を浴びていくものと思う。

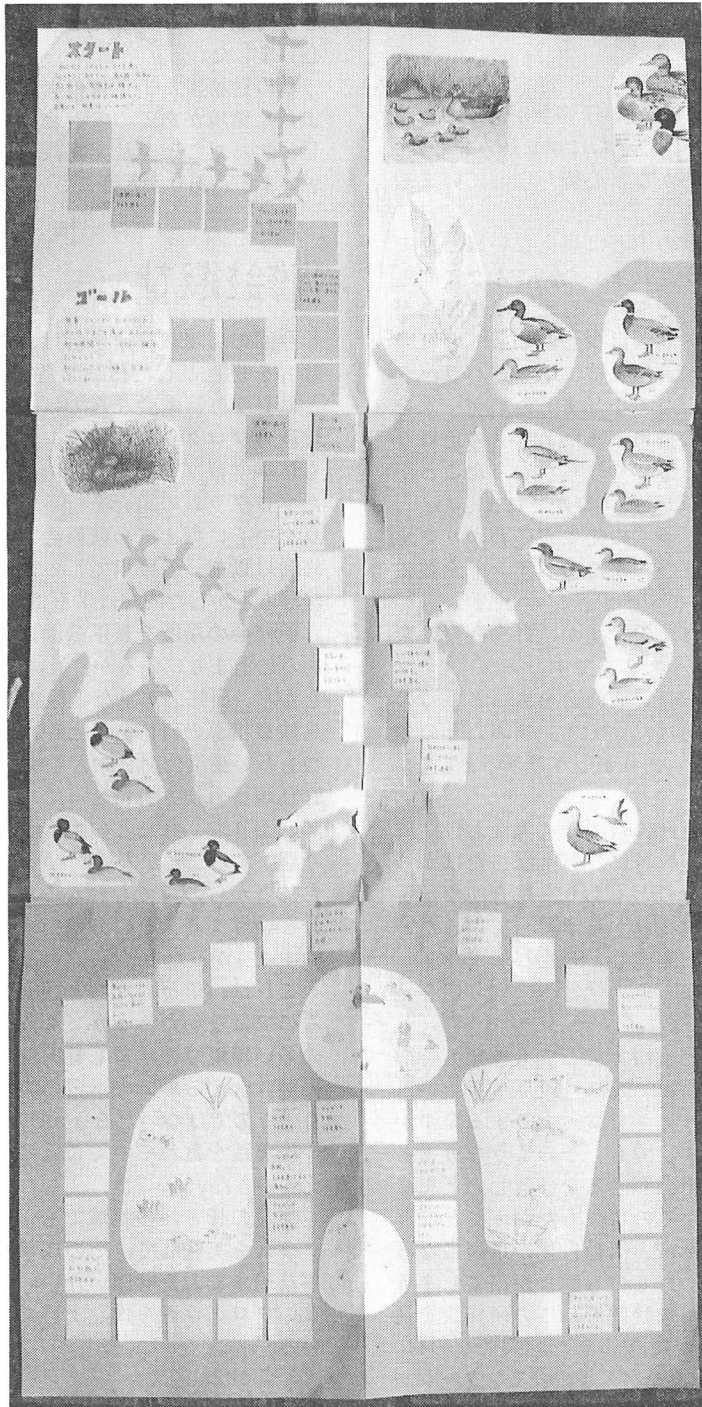
11. カモを題材にして、ものづくりをしよう。

学習のまとめとして、人生ゲームならぬ「カモ生ゲーム」として、カモの一生をすごろくにまとめてはどうかと、今回の研修会のスタッフの一人である巢山香里氏が作成し、提案してくれた。内容が大変すばらしく、実際に子どもたちと作成して、遊んでみたい気になってしまうスグレモノだ。

子どもたちが観察したこと、調べたことをとりまとめる際、新聞などとしてまとめるのも良いが、学習後も楽しめるこのようなアイデアも、ぜひ生かしていきたいものだ。



「カモ生ゲーム」について巢山香里氏の説明を聞く



巢山香里氏作成による「カモ生ゲーム」

〔参加者の感想〕

○ 「小学校教員向けの良い研修会があるのよ。」と紹介されて、その日のうちに申し込みました。早くこの日が来ないかなと心待ちにしていました。

長浜公園は、横浜の中とは思えないほどカモがたくさんいて驚かされました。こんなに間近でカモを見たのは久しぶりでした。私は野鳥が好きでカモの種類や名前は少しは知っていたつもりだったのですが、頭と体、尾などバラバラにされると、わからなくなりました。ゲームを通しての見分け方の指導、またスズメの色ぬりなどで、知っているようで知らなかったことがたくさんあることに改めて気づかされました。

堤先生をはじめ、多くの先生方のわかりやすい説明、そして観察のしかたのポイントを教えてください、感謝しています。

今回、主人も誘ったのですが、野鳥観察の楽しさに目覚めてしまったようです。

このようにすばらしい研修会をもっと多くの先生方に知らせてあげたいです。学ぶことの多かった観察会でした。ありがとうございました。

○ 先日の環境教育研修会では、大変お世話になりました。私は、教員に今年度なったばかりで低学年担任ということもあり、総合的な学習の時間については、これから学習していきたいと思いますが、カモを中心としたバードウォッチングに親しみながらその学習への切り口を見つけたような気がします。

はじめに、カモと一口で言っても種類も特徴も様々でとても興味深いと思いました。何といってもカモが泳いだりえさを食べたりする姿がかわいらしかったです。でも、そのようなカモと子どもたちをどう出会わせるかは難しいと思っていました。せっかくの特徴もただカモとひとくくりで見えてしまえば、活動自体が単調になってしまうし、子どもたちにも飽きが出てしまうのではないかと。そんな疑問も、この研修会を通して解決することができました。大切なのは、その出会わせ方で、カモパズルやカモターゲットなど工夫を凝らすことによって、活動を広げ深めることができることを知りました。また、野鳥のカウントなど他教科と合科的に取り組むこ

とが可能であり、とても魅力的な題材だなと感心しました。

私の勤務する小学校の周辺には野鳥観察に恵まれた環境があるので、そのような環境を生かし、学んだことを是非実践に移していきたいと思えます。ありがとうございました。

〔研修会を終えて〕

今回の環境教育研修会は、これまでの「環境教育を視点とした体験学習プログラムの提案」とは異なり、本会ならではの「野鳥を通した環境教育プログラムの提案」となった。前回までも体験学習プログラムの中に、野鳥を取り入れたプログラムの紹介を行ってきたが、今回は野鳥を中心に据えての研修会となった。同様の研修会は以前、多摩川で行ったのだが、その時の経験も生かした内容にすることができたと思う。

研修会の場所を長浜公園にするかその近くにある船溜まりにするか、最後の最後まで悩んだ。しかし、研修会が単なる野鳥観察ではなく、「野鳥観察指導の研修会」という点を考え、種類も数も多い長浜公園をあえてサブポイントとした。野鳥観察の初心者にとっては、種類や数が多いことよりも、野鳥との距離が近い場所でじっくり観察することが大切だろうと判断したのだが、参加者からの声でもわかるように、それでも十分というより、その方が指導のポイントを伝えやすく良かったと思う。

これは、子どもたちと観察する場合にも言えるのではないだろうか。もう少し言えば、野鳥の多い環境での学習も魅力的だが、野鳥と身近に触れ合える場での学習の方が小学生にとって有効なのではないだろうか、ということである。今後実践を重ねていくことにより、その点も考えていきたい。

会員の皆さんの地域でも、ぜひこれらのプログラムを実施して、その成果や参加者の感想を事務局までお寄せ願いたい。皆さんと共に良いプログラムを作り上げていきたいと考えている。

もりまき通信(19)

～何がちがうの？生き物の呼び名～

自然観察指導員 桐原（森） 真希

●素朴な疑問

生き物や自然を相手にしていると、様々な疑問が湧いてくる。どうしてこんな形をしているの？ どうしてこんな動きをするの？ どうしてそんな色をしているの？ と気になりだしたら、きりが無い。

今回は、各所の自然観察会でよくたずねられた「何がちがうの？」という疑問や質問のうち、そのいくつかについてまとめてみた。現場できちんとした説明できなかったのも、私自身の頭の整理にと今回のテーマを選んでみた次第である。

●イルカとクジラ

大きな分類上では、どちらも哺乳綱クジラ目に属する生き物である。鯨類（げいりい）と総称され、世界に約100種、日本近海に40種程が生息しているといわれている。ものの本によると、4～5メートル以上がクジラで、それ以下はイルカとされているが、明確な線引きはないらしい。

「クジラ・イルカ大図鑑」（平凡社）では、英語における三つの表現について解説されている。ホエール（whale）は、体長3メートル以上のもの、それ以下のものはドルフィン（dolphin）、また例外としてネズミイルカ科の小型のものはポーパス（porpoise）と呼ばれている。

しかし、クジラ類最小といわれるオガワマッコウは、最大のイルカ類であるハンドウイルカよりも小型で、例外はいつもつきものである。

私はまだ野生のイルカ・クジラ類をきちんと見たことがない。11年前に北海道行きの船の浴室から、窓越しにそれらしき背中をちらっと見ただけで、その記憶もだんだんかすれつつある。マリナーパークや水族館での出会いも良いが、やはり野生の姿をしっかりと見てみたいものである。

●ワシとタカ

何となく、ワシは大きく、タカはそれより小さいという印象があるが、ここで「図鑑日本のワシタカ類」（文一総合出版）を開いてみよう。分類学上では、ワシもタカも脊椎動物門・鳥綱・タカ目である。ちょっと前まではワシタカ目といわれていたが、最新の分類ではタカ目とシンプルな呼び名になった。この名には、ワシ類、タカ類、ハヤブサ類、コンドル類が含まれている。

しかし、イルカ・クジラ同様、ワシ類とタカ類という言葉にもちゃんとした線引きはない。ワシっぽいのにタカ？ タカっぽいのにワシ？ という事例として、次のようなものが挙げられていた。

クマタカは、日本産の猛禽類の中でもかなり大型の鳥で、カラフトワシと同レベルのサイズであるにもかかわらず「タカ」と呼ばれ、ハシブトガラスと同じくらい大きさのカムリワシが「ワシ」と呼ばれている。

我が家には、ある剥製屋さんからいただいた「モモアカヒメハヤブサ」の剥製がある。大きさはスズメくらい。これでもタカ？ という大きさである。恐らく世界最小クラスの猛禽であろう。主に飛翔昆虫を食べているらしい。地球にはいろいろな生き物がいるものだと、その剥製を見ながら改めて感じるのであった。

●トンボとヤンマ

トンボは漢字で表すと蜻蛉、分類上では節足動物門・昆虫綱・トンボ目（蜻蛉目）となる。世界に5000種以上、日本では約200種が確認されている。実に奥深い生き物で、近年ビオトープの広まりと共に注目されている昆虫である。トンボ、ヤンマ以外にも、アカネ、サナエ、カワトンボなど、いろいろな呼び名がある。また、トンボは地方によって様々な呼び名があり、特に大形のオニヤンマやギンヤンマなどは地域ごとに愛称が違うとか。

トンボ類の呼び名を整理するには、まず「科」の分類を確認しておくのと分かりやすい。日本産

のトンボは、大きく3つのグループに分けられている。イトトンボ亜科、トンボ亜科、ムカシトンボ亜科がそれである。

イトトンボ亜科は、前翅と後翅がほぼ同じ形状で、トンボ亜科は違う翅の形をしている。ムカシトンボ亜科は1科1属1種（世界には2種）のトンボである。それぞれのグループの科については下記の通り。

<イトトンボ亜科>

- ・カワトンボ科
- ・ハナダカトンボ科
- ・ミナミカワトンボ科
- ・ヤマイトトンボ科
- ・アオイトトンボ科

<ムカシトンボ亜科>

- ・ムカシトンボ科

<トンボ亜科>

- ・サナエトンボ科
- ・ヤンマ科
- ・オニヤンマ科
- ・エゾトンボ科
- ・トンボ科

こうして科名を見ていくと、ふだん何気なく使っているトンボの呼び名が、そのまま分類の名としても使われているようだ。

私はまだイトトンボの仲間や、南西諸島もの、高山ものなどの種名を識別できる能力はないが、「○○の仲間」という解説ができるようになるだけでも、トンボ観察に関するネタ作りやきっかけ作りの道が開けるのではないか思う。

●フクロウとミミズク

単に「フクロウ」と聞くと、一般には梟の仲間の総称というイメージがあるようだ。フクロウという種名の野鳥が存在することについての認知度は意外と低いらしい。

これと同じようなことが神奈川県の県鳥カモメについても当てはまるかもしれない。私自身、ただの「カモメ」という名の鳥がいることを知ったとき、それはとても衝撃的だったことを今でも思い出す。

一方、「ミミズク」という種名の梟類は、日本にはいない。「世界鳥類和名辞典」(大学書林)でも記載されていない。「ミミズク」という名の

昆虫はいるのだが。

フクロウ類とミミズク類、これも生物分類上の違いはない。いずれも鳥綱・フクロウ目の仲間である。日本では12種が確認され、世界には130種以上が生息している。

フクロウ類の中で、頭に生えている「羽角(うかく)」が目立つものをミミズクと呼び、種名の語尾に「○○ズク」と名付けられていることが多い。しかし、これにも例外がある。日本の夏鳥のアオバスクは、特に目立つ羽角はないのに語尾にズクがつくのに対し、立派な羽角を持つシマフクロウには「ズク」がつかない。

ところで、この羽角は耳と取り違えられることがままあるが、聴覚器官としての耳の機能はない。本物の耳は目の横にあり、羽毛に隠されているため、見えないのだ。何のためにここにあるのか、まだ正確には解明されていないようだ。

ある年の冬、主人の職場の米子水鳥公園近隣にトラフズクが飛来し、マスコミを騒がせたことがあった。私も現地に出掛け、どんなときに羽角を立てるのか注意深く観察してみたのだが、落ち着いている時は寝かせているように思われた。羽角を立てているのは、罠(ねぐら)で休んでいる時や敵の接近で緊張しているときだった。しかし、落ち着いているように見える時でも羽角が立っていることも多かった。結局、羽角を立てたり寝かせたりするのは、本人(本鳥?)の気分次第なのかもしれない。

●種名に総称に愛称に…

生き物のことについて調べたい、知りたいと思った時、まず手がかりとなるのは、その「名前」である。しかし、てっきり正式和名と思って調べていたら、実は俗称だったとか、別名だったとか、そんな体験をお持ちの方は多いのではないだろうか。

それでも、「名前が分かる」という最初の1歩があると、その生き物に対しての親しみも湧き、そこからさらに意識も広がり深まっていくように思う。「生き物」と「名前」の関係は、踏み込んでいけばいく程、奥が深そうである。

村本義雄顧問トキ保護功労者として表彰される

本会顧問の村本義雄氏が、平成15年9月23日、東京有楽町朝日ホールで開催された「平成15年度山階芳麿賞授賞式・受賞記念講演と記念シンポジウム」の記念シンポジウム「未来にはばたけ Nipponia nippon 朱鷺」の際、佐藤春雄、近辻宏婦氏と共に、トキ保護功労者として表彰されました。

編集後記

すっかりお待たせしてしまいましたが、ようやく69号をお届けすることができました。

今回は、昨年に実施しました、「第3回 環境教育研修会 in YOKOHAMA」の報告と共に、実践上のポイントについて、担当理事の堤達俊氏にとりまとめていただきました。

この「環境教育研修会 in YOKOHAMA」も、堤氏のご尽力と共に、横浜市の先生方のご協力も得て、回を重ねつつ、確実に成果を上げてきています。

これからも地域に根ざした活動の一つとして継続していければと考えています。

もりまき通信では、鳥類にだけにとどまらず、広範囲な自然観察指導に携わっていらっしゃるご経験に基づいたユニークなテーマでご執筆いただきました。ありがとうございました。

今回、事務局を置かせていただいているNPO法人環境学習研究会の依頼により、同会の機関誌「ecok 東京」の特集に本会として情報を提供する機会を得ました。

そして、同会のご厚意で、その機関紙をお分けいただきましたので、会員の皆様にお配りいたします。

内容としては、あくまでも野鳥についての初心者である学校（とりわけ小学校）の教員を対象としていますが、総合的学習などの場面をと

らえて、こうすれば野鳥を題材にした実践や指導ができますよという風に構成してもらいました。

企画・執筆には、島田利子副会長、堤達俊常務理事、小野紀之常務理事、箕輪多津男JSPB嘱託職員、染谷が携いました。

これからも、NPO法人環境学習研究会とは相互に助け合える関係を築いていければと考えています。

また、NPO法人環境学習研究会が主催した「環境学習アワード2003」の審査に、杉浦会長と染谷が審査員として参加する機会を得ました。これについても、何らかの形で報告ができればと考えています。
(染谷)

愛鳥教育 No.69

平成16(2004)年2月29日

発行人	杉浦嘉雄
発行所	全国愛鳥教育研究会
住 所	〒104-0061 東京都中央区銀座2-10-11 八田ビル4F NPO法人環境学習研究会内
電 話	03-3547-1650
FAX	03-3547-1650
会 費	3,000円
郵便振替	00180-7-12442
印刷所	祐文社